

2019年10月8日

株式会社インプレスR&D

<https://nextpublishing.jp/>

持続可能な世界をつくる女性農家の挑戦

「耕す女(ひと)」発刊

多彩なキャリアを持つ女性農家のエッセイ集、農業から次の時代を考える

インプレスグループで電子出版事業を手がける株式会社インプレス R&D は、『耕す女(ひと)(副題:持続可能な世界をつくる女性農家の挑戦)』(編者:NPO 法人田舎のヒロインズ)を発行いたします。

『耕す女(ひと)』

<https://nextpublishing.jp/isbn/9784844396925>



編者:NPO 法人田舎のヒロインズ

小売希望価格:電子書籍版 1,600円(税別)/印刷書籍版 2,100円(税別)

電子書籍版フォーマット:EPUB3/Kindle Format8

印刷書籍版仕様:四六判/カラー+モノクロ/本文238ページ

ISBN:978-4-8443-9692-5

発行:インプレス R&D

<<発行主旨・内容紹介>>

全国の女性農家が集まるNPO 法人田舎のヒロインズの編集による、農業に取り組む女性たちのエッセイをまとめた本です。表紙の題字「耕す女(ひと)」は映画『おくりびと』の脚本でも知られる小山薫堂氏、表紙の絵は ALS 患者で視線入力によりイラストを描く榎浩行氏の作品です。また、巻頭には ap bank 代表理事の小林武史氏、『ソトコト』編集長の指出一正氏からの応援メッセージを掲載しています。

本書のテーマである農業は、食料を生産して命を育むだけでなく、エネルギーの循環、環境の維持、教育など多面的な機能を備え、持続可能な社会を支える役割を担っています。本書は多彩なキャリアを経て農業に取り組んでいる女性たちが、それぞれどんなきっかけで農業を始め、いま何を考えて取り組んでいるのかを語ります。

力あふれる女性農家の視点から、次世代の社会を考える一冊です
(本書は、次世代出版メソッド「NextPublishing」を使用し、出版されています。)

第1部「耕す女(ひと)」では、子育てと両立しながら農業に取り組む13人の女性が新しい視点で農業を語る

第1部



大塚 なほ子

(おおつか なほこ)

長野県軽井沢町

農産物・大塚農園・丹羽農園(岐阜県海津市の実
 家)
 生産物・インゲンマメ・スナップエンドウ(在来
 種)等、丹羽農園はみかん、柿、キウイ、イチ
 ショウ、米、野苺、おひろひろ、無添加ジャム
 同居家族・夫、子供2人(3歳と、0歳)の4人
 家族

耕す女⑦

いう立場は同じであり、共感することは多々ある。お互いに、今日まで家業を守り続けてくれた両親に感謝しながら、次世代へ承継していけるよう共に学び続けたい。
 まだまだ勉強不足ではあるが、先代の作り上げたこの流れを守り、しっかりと現状把握しながら新しい知識を学び、新たな産業へつなげていく！そのためには6次産業化へ踏み出し、さらなる大きなプロジェクトを地元の方々と共に作り上げていくことで農業が地元の産業となり、但馬の活性化、兵庫の農業、日本の農業の発展につながると考えている。

62

第2部「耕す女(ひと)の仲間たち」では、有識者から学生までが寄稿

161 第2部 耕す女の仲間たち

映画作りの原点としての農村

ドキュメンタリー映画監督・有責任事業組合では堂代表 渡辺智史

おだやかな革命―これからの時代の「豊かさ」を問いかける

私は山形県のある城下町・鶴岡市を拠点にドキュメンタリー映画を制作している。これまで地域性の濃いテーマでドキュメンタリー映画を制作してきた。前作の映画『よみがえりのレシピ』は、大量生産、大量消費の現代社会において忘れ去られた伝統野菜のタネを守る農家の物語だ。収量が低く、病気に弱いという理由で忘れ去られた伝統野菜に関する映画だ。現在は品種改良された野菜が圧倒的に主流で、収量が低く、病気に弱い伝統野菜は流通に適さないとされてきた。昔懐かしい味や香りが愛おしいと、誰も栽培しなくなった伝統野菜を大事に守り続けてきた。かつては限界集落という言葉が盛んにメディアで叫ばれていたが、ここ10年ほどで農村には穏やかな変化の兆しがあった。『よみがえりのレシピ』に登場する若者は、実家に代々伝わる在来の芋の栽培を継承するため、会社を退職して新規就農した。そして今では芋だけでなく、栽培の担い手がいなくなった親戚のリンゴ畑を受け継ぎ、芋もリンゴも事業として成功している。それまで都会にだけ目を向けてきた若者たちが、確実に地域やローカルを意識し始めている。山形という場所での撮影をしてきた中で見えてきた、地域の変化の兆しが、今回の映画『おだやかな革命』の企画の原点となっている。

農家の思いに共感して集まったシエフ、大学教授や新規就農した農家が織りなす「食のコミュニティ」が誕生する姿を描いた。全国300箇所以上で上映され、海外の映画祭でも招待上映された。私自身は『よみがえりのレシピ』の撮影のために、東京から戻り故郷を拠点に映像制作を始めることになった。それまでは、ドキュメンタリー映画を作り、全国に配給するとすると首都圏で仕事をすることが常識だったが、今ではネットや流通の進歩によって、地方で仕事をすることも難しくなくなってきた。より積極的な理由を見出すとすれば、地域に暮らしていると、地域が抱える課題をよく理解できる。それが次回作の映画の企画につながることも多い。全国各地で抱えている地域課題の多くは共通していることもあり、地域課題を掘り下げた映画は、他の地域でも観てもらえるチャンスがあるのだ。

160

第3部 「耕す女(ひと)一時を超えて」では、過去の文集に寄せられたパイオニアの女性たちの言葉を掲載

「柚餅子(ゆべし)とともに二十三年(長野県・関京子)」

長野県の最南端の天龍村坂部は、温暖な気候に恵まれ、春一番に特産の竜峡小梅の花がほころび、初夏には茶摘み、秋には柚子が黄金色の実をつけます。

今こそ、女性による農産物加工や販売は女性の起業としてもはやされ、県下各地で盛んに行われていますが、未知の分野に挑戦し、その草分けになつたのが「天龍ゆべし生産組合」です。

昭和四年、心の支えを求める若妻十人で生活改善グループ「あゆみ会」は結成されました。坂部には国の重要無形文化財の冬祭りがあり、伝統的な食文化も残されています。特に「柚餅子」は、武士の携帯食として作られ、現在まで冬の保存食として細々と受け継がれてきました。柚

子の中身をくりぬいた皮に、みそ、くるみ、砂糖と小麦粉を混ぜたものを詰め、蒸して三ヶ月かけて干し上げます。

柚子の風味と深い香りに大きな感動を覚え、グループで試作品を展示販売したところ、一束たりもの嫁たちが勝手に柚餅子売り出した。嫁に柚餅子の味がわかるものか」と周囲からの反発や、生活改善グループが経済活動することへの批判が相次ぎました。

ところが、正月気分が抜けたある日、東京の高級日本料理店より一千個の注文が舞い込んだの

です。

さあ大変です。許可のある加工施設を建設しなければなりません。資金や敷地などの問題に、夫婦同伴で毎晩のように会合を重ねました。若妻たちの熱意が夫達を動かし、一五戸三〇人で「ゆべし生産組合」が結成され、国や県の補助事業を受けた加工所が昭和五二年の春に完成し、本格的な活動がスタートしました。

しかし、道のりは決して平坦なものではありませんでした。柚餅子という説明のいる商品で、東京のアパートでの販売は恥ずかしさに声も出ず、一日中立ち通しの辛さを体験しました。また、飯田の街中を柚餅子を背負い、足を棒にしてやっと一軒の土産物店で取引にのつていただくなど、厳しい状況が続きました。

限られた季節商品ゆえにコストも高く、一品だけでは売り上げも伸びず、赤字は増えるばかり。食品工業試験場等関係機関の指導を受け、柚子味噌、柚子ジャム等年に一品ずつ商品開発できるよう心がけてきました。今では商品も二五品種に増えていきます。

材料代、賃金等の支払いもままならないときもありましたが、マスコミに大きく取り上げられてもらったため、全国各地から視察者が訪れました。また、女性による起業活動が珍しく、県知事や、農林水産省はもとより自治省、国土庁、運輸省、通産省等からも視察に見え、注目を集めたものです。

<<目次>>

第1部 耕す女(ひと)

- 大津愛梨「農業なくして持続可能な社会なし」
- 高橋菜穂子「地域を生かす、女が生かす」
- 吉村みゆき「畑から食卓へ」
- 加藤絵美「えがおになれるお米をふくしまで」
- 谷江美「都市と農村をつなぐ」
- 小田垣縁「養豚場から愛をこめて」
- 大塚なほ子「美しさ、強さの源は畑に」
- 藤原美里「農村だからこそできる子育て」
- Yae/藤本八重「半農半歌手という生き方」
- 北澤美雪「農業が果たす多面的機能」
- 長田奈津子「家族と一緒に台所に立ち、家族と一緒に食事をとる幸せ」
- 稲澤エリナ「ファーマーの夫と命の誕生の場に寄り添う助産師のコラボレーション」
- 宮崎悦子「元帰国子女OL、農家の嫁になる」

第2部 耕す女(ひと)の仲間たち

- 30年を経た農業の多面的機能という概念(和泉真理)
- 地に足をつけた生き方のススメ(今村司)
- 服も農産物～オーガニックコットンの畑から考える顔の見える服づくり(鎌田ありさ)
- 女性が主演の農業こそが輝く(神告行)
- 農業ICTから広がる夢(大山りか)
- NPO 法人田舎のヒロインズの書籍出版に寄せて(太田太)

酪農を通して子供たちが夢を抱ける世界を(堤夏穂)
おだやかな革命～これからの時代の「豊かさ」を問いかける(渡辺智史)
初めての来日時に阿蘇で地震を経験して(ステラ・ウィンター)
耕される男(大津耕太)

第3部 耕す女(ひと)時を超えて

夢の続き(羽生たまき)
手作りのハムで伝える、夢ある農業、農村文化(北見満智子)
干拓問題について考える(西村ふじ子)
十路の反抗期(小林幹子)
紅葉の南フランスを訪ねて(新開玉子)
藎草を織る(星田真理子)
「かまど」の教え(稲本康子)
柚餅子とともに二十三年(関京子)
ヒラタケの恩恵(望月玉代)
異国より友きたる(尾崎千恵子)
都市農業を支える元気な女性達(白石敏子)
農業をする自分が好きですか(田中泉)
我が家は農家 こんな農業しています(小林優子)

<<編著者紹介>>

NPO 法人田舎のヒロインズ

前身となる「田舎のヒロインわくわくネットワーク」は、農を営む女性たちの呼びかけにより、1994年3月に結成された。2014年3月、団体名を「NPO 法人田舎のヒロインズ」に変更し、40代以下の現役若手女性農家が役員となる体制に刷新。農を営む女性が、自ら考え、行動し、社会に訴えかけていくという意識を受け継いで、再スタートした。現在は農を応援してくれる方々、学生、男性へその輪を広げ、全国に約160人の会員がいる。「農業後継者不足の解消」をモットーに、農業や農村の意義および価値を女性の視点から見直し、農業に関心を持つ次世代を増やすための提案・提言の活動を行っている。

<http://inakano-heroine.jp/>

<<販売ストア>>

電子書籍:

Amazon Kindle ストア、楽天 kobo イーブックストア、Apple Books、紀伊國屋書店 Kinoppy、Google Play Store、honto 電子書籍ストア、Sony Reader Store、BookLive!、BOOK☆WALKER

印刷書籍:

Amazon.co.jp、三省堂書店オンデマンド、honto ネットストア、楽天ブックス

※ 各ストアでの販売は準備が整いしだい開始されます。

※ 全国の一般書店からもご注文いただけます。

【インプレス R&D】 <https://nextpublishing.jp/>

株式会社インプレスR&D(本社:東京都千代田区、代表取締役社長:井芹昌信)は、デジタルファーストの次世代型電子出版プラットフォーム「NextPublishing」を運営する企業です。また自らも、NextPublishing を使った「インターネット白書」の出版など IT 関連メディア事業を展開しています。

※NextPublishing は、インプレス R&D が開発した電子出版プラットフォーム(またはメソッド)の名称です。電子書籍と印刷書籍の同時制作、プリント・オンデマンド(POD)による品切れ解消などの伝統的出版の課題を解決しています。これにより、伝統的出版では経済的に困難な多品種少部数の出版を可能にし、優秀な個人や組織が持つ多様な知

の流通を目指しています。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:唐島夏生、証券コード:東証1部9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「旅・鉄道」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

【お問い合わせ先】

株式会社インプレス R&D NextPublishing センター

TEL 03-6837-4820

電子メール: np-info@impress.co.jp